

---

# Angel Bear[White]

初見 裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A n g e l B e a r「W h i t e」

### 【Nコード】

N 8 5 1 5 F

### 【作者名】

初見 裕

### 【あらすじ】

クリスマス・イヴ。だからといって何か特別な予定があるわけでもなく、優奈は学校からの帰路を足早に歩いていた。その途中、彼女は少女に出会う。無邪気で純粋、そんなイメージを受ける少女との、少しだけ不思議な、けれど幸せな一日。

## 1・白い少女

住宅街にある小さな道。昼間ではあるが、優奈ゆうなのほかに人影は見あたらなかった。元々人通りが多いとは言えない道だ。それに加え、今日は昨日までに比べ、ぐっと気温が落ちている。心地いい室内からできるだけ出たくないと思うのは、当然だろう。

暖房の効いているはずの我が家を求めて、彼女は足早に歩いていた。

口元までマフラーで覆い、手は手袋をしてコートのポケットに。顔の三分の二ほどと、足——本当はタイツをはきたいのだが、残念なことに、学校が校章のロゴ入りのハイソックスを指定している——しか露出がないようにしていた。ちなみにストレートの黒髪は結ばずにおろし、首と一緒にマフラーで巻かれている。

十二月二十四日、クリスマス・イヴ。明日でようやく学校が終わる。一応明日は友人と約束をしているが、今日は家で怠惰に過ごすことしか予定になかった。

家に帰ったら何をしようか。読みかけの本がある。お菓子作りもいいかもしれない。でも作りかけのビーズのストラップもあるし……。

空を見上げると、空は重たそうな雲で覆われていた。この季節、晴れた日は鮮やかな青色を見せてくれるのだが、残念ながら今日は違うらしい。今日外出するのは、あまり好ましくない。

空は重たく、空気も重たい。そんなところにおいても気分まで重く

なるだけだ。

考えながら角を曲がる。早く帰ろう。そう思っていたのだが、目に入ったものに驚き、足を止めてしまった。

蹲る、白いもの。猫や犬のように、小さくない。人だ。真っ白な髪を持った、人。

……人？

はたと我に返った。この寒い冬空の下、蹲る、白髪の、人。

それはつまり、もしかすると、危ない、事態。

「だっ、だっ、だっ！」

大丈夫ですか！？

そう言おうとして、どもり、それから口を開けたままに固まった。白髪の人が優奈を振り返ったからだ。

少女だった。

寒さのためか白い肌を赤く染めている、翠色の瞳をした少女。小学生か、中学生か。優奈よりも三つか四つ、幼いようだ。

人であること以上に、『白』の印象を受けたのは、後ろから見ると彼女は白以外の色も持たないからだろう。髪は白。肌も非常に白く、彼女が着ているダッフルコートも白。

もつとも、前から見てもその印象は大して変わらなかった。結局、ブーツは白。手袋も白。斜めがけのバッグも白で、肌の白さもよく目立っている。ひたすらに白い。

外国の子か。色素が薄いという病気を持った子か。

何にせよ、彼女の持つ色彩にかかわらず、とても愛らしい。触れたら壊れてしまいそうな繊細さをその身に抱いており、優しく守ってあげたくなってくる。

優奈はその、どこか浮き世離れた雰囲気にも呑まれていた。

「……だ？」

少女は小首を傾げて言った。不思議な響きをした声に、意識が戻される。

「あ、だ、大丈夫？ そんな何もないところでしゃがんで、寒いでしょう？ 具合が悪くても、こんなところじゃ、もつと悪くなっちゃうよ」

優奈の言葉に、少女は大きな目を瞬かせた。そしてにっこりと笑って立ち上がる。

花が綻んだような笑顔、というのはこういうことを言うのだろう。寒さも忘れ、季節を春と勘違いしてしまいそうだ。

「大丈夫です。具合が悪いからしゃがみ込んでいたのではないのです」

淀みなく話される日本語。少なくとも、育ってきたのは日本なのだろう。けれど、先に話を通じておくかどうか考えるべきだったのかもしれない。今更ながら、優奈は会話のできる相手であったことに安堵した。

「ええと、じゃあ、なんで座っていたの？」

「座りたくなっただけなんです」

「はあ……」

よくわからない。なぜ座りたくなっただけかを、聞いていたのだけ  
れど。

まあ、具合が悪くないのなら大丈夫だろう。本人はにこにこしているのだから、何か悪い理由があるわけではないんだ。優奈は一人納得した。

「お姉さんも参加しますですか？」

「何に？」

「冬空風陽感測の会、です」

「ふゆぞら……何？」

「冬空、風陽、感測、の会です」

冬の空の下、この季節特有の冷たさを持つ風と、強くはなくても確かな温もりをくれるお日様の光を感じる会なのです、と自然な調

子で言う彼女に、優奈はつい、頷いてしまった。

「あ、ちなみに、感測の『測』は、語呂がよくなるのでつけました  
なのです」

おかしいことを、当然のように言う。こういう、『天然』な子は  
あまり好きじゃない。しかし彼女に限っては、構わないような気が  
した。雰囲気、似合っていたから。

「私は、うん、遠慮しておくよ」

「そうですか……？」

優奈は頷いた。少女にはそういう行為が違和感なくとも、自分が  
やると違和感の塊でしかない。少し残念そうに眉尻を下げた少女の  
様子には胸が痛むが、その「冬空風陽感測の会」に入ったところで、  
いたたまれない気分になるのは目に見えている。

そもそも、この曇り空の下で日の光を感じるというのは、少し…  
そう、大変そうだ。

「わかりましたなのです。私もやめるのです」

「え？ いやいや、私に付き合う必要ないよ。」

慌てて答えると、少女はまた、にっこり笑う。

「私、お姉さんと一緒にいたいのです。冬空風陽感測の会は冬の間  
ならいつでもできますですが、お姉さんと会えるとは今日のこのと  
きだけで、一緒に過ごせるのはほんの短いときしかないかもしれな

いのです」

不思議な子。漫画や本や、劇の中でだけ言われるような言葉を、とても自然に伝える。それが心に、すっと落ちる。

「そう、だね。今日は予定もなかったの。だから、一緒に遊びに行こうか」

「はいっ！」

白い少女は、輝かんばかりの笑顔を見せた。

## 2・趣味

少女の名前は雪羽ゆきはというらしい。優奈の三つ年下である十三歳、つまり中学生だ。

「ほあ、高校生のお友達さんは初めてなのです」

愛くるしく笑う少女と優奈がまず向かう先は、優奈の自宅だ。

遊びに行く予定はなかったので、所持金が心許ない。雪羽はお金を持っているのか聞いたところ、大丈夫だと断言されたので、問題ないだろう。

母親への挨拶もそこそこに、雪羽を優奈の自室へあげた。ちなみに、母親は雪羽を大絶賛。やれ可愛いまあ可愛い、あんたもこれくらい可愛いのある子になんない。というのが母の少女へ対する感想兼優奈へのお小言だった。

「ごめん、お母さんうるさい人で」

「いいえ、とても素敵なのです」

雪羽は騒がしい母を不快に思わなかったことに、少し安心した。しかし、彼女が不快に思うことがあるのだろうか。

優奈の部屋を見回し、素敵なのが一杯です！と騒ぎ立てる彼女を見る限り、なさそうだった。

二階建ての一軒家。一階にはリビング・ダイニングなど家族で過ごすためのスペースがあり、二階に個人の部屋がある。

優奈の部屋も二階にあった。五畳半の部屋はベッドにその三分の一というスペースを明け渡している。洋服ダンスに、勉強机、椅子、本棚。必要な家具を詰め込んだだけで、あっという間に人の入れるスペースは限られた。

「ベッドの上、座っていいよ」

机の上に置いてある貯金箱に手を伸ばしながら、雪羽を促す。ぽすつと彼女が腰を押しつける音がした。

「綺麗に整理してありますですね」

「ああ、うん。掃除とか嫌いじゃないし、整理しておかないとビーズとか、なくしちゃうもの」

千円札を三枚ほど取り出し、財布に入れる。大金を持ち歩くのは好きではないし、これだけあれば、まあ、多少買い物にしても大丈夫だろう。雪羽に何かを買ってあげたとしても、だ。

「ビーズ、ですか？ 何に使うですか？」

きよとりとして首を傾げる彼女に、優奈は微笑んだ。三つ、いや、それよりももっと年の離れた妹を持ったら、こんな気持ちになるのだろうか。

「ビーズを使って指輪とか、携帯ストラップとか、そういうものを作るの。例えば――」

机に付属している棚の上から、一つ摘んだ。

「このペンダント。ヘッドのロザリオの形は、ビーズで作ってるの」

「ほえ、凄いです凄いです！ これ自分で作るんですか？ 他にも作れるんですか？」

素直に興味を示し、褒めてくれる雪羽に、優奈は頬がゆるむのを感じた。うれしくて、つい色々と説明したくなってしまっ

「そう。ペンダントとか、アクセサリだけじゃなくてね……ほら、子猫ちゃん」

蒼い双眸の黒猫を見せる。これはなかなかの自信作だ。

「はわわわわわ、可愛いです、可愛いです可愛いです！」

瞳を輝かせ、頬を上気させる。雪羽ほどに反応を示してくれる子は早々いないだろう。雪羽の手にビーズ製の黒猫を乗せると、彼女はへにやりと表情を崩した。

「凄いです……。こんなに可愛いもの、作れるんですね……。優奈さん、凄いです！ 凄すぎです！」

「そ、そんなに褒めるほどじゃないよ」

さすがに、彼女の真っ直ぐな言葉に、照れが生じた。しかし、雪羽はぷるぷると首を横に振る。

「素敵なことです！ 自慢するべきことです！ 私にはこんなに可愛いもの、作れませんです！」

「あ、じゃあ、作ってみる?」

「ほへ?」

意気込んで話す雪羽に言った言葉。彼女の恥ずかしいセリフから逃れるためでもあるのと同時に、彼女と一緒に作ったら楽しそうだと思ったからだった。

「少しなら、教えられるから。まずは簡単なものから、やってみない?」

雪羽は手のひらの猫と優奈を見比べる。やがて、優奈の言葉を理解したかのように、顔を輝かせた。

言葉も出ないといった様子で、ひたすら頷く。そんな雪羽に優奈は笑いかけた。

「初めてでも、糸にビーズ通すだけ、みたいなのはあんまりおもしろくないよね。んー、花モチーフのストラップ、とかかな」

「楽しみです」

雪羽から黒猫を返してもらい、棚に戻す。材料があるかどうかを探すため、ビーズ収納に使っているチェストを開けた。

「あ……」

「ほあ? どうかしましたですか?」

コートを片手に、雪羽が優奈に近づいた。部屋に長居をすることになるから、脱いだのだろう。

「うっん、大したことじゃないの」

「でも、何かあったですよね？」

不安げに瞳を揺らす少女に、苦笑が漏れた。

「今、作りかけのモチーフの材料が足りなかったんだよね」

昨日気がついて、明日買いに行こうと考えていたのだけど。ああ、鳥頭。すっかり忘れて今を迎えている。

つい胸について出そうになるため息を、雪羽の前だからと抑えた。

「買いに行きます」

「え？」

「今から買いに行きましょうです」

彼女はすでに真っ白のダッフルコートを着始めていた。

「え、でも、そうしたらビーズアクセ、作る時間がなくなっちゃうよ？」

「いいのです。ただ、」

しっかりとコートのボタンまで留めて、雪羽は笑う。

「ビーズの初心者用のご本、紹介して下さいです」

少しずつ、練習していきますです、と続けて、彼女は扉に手をかけた。

優しい子。不思議に温かくて、一緒にいるだけで笑顔が出てくるような雰囲気を持っている。

ああ、良い子だと、そう思った。

### 3・絵本

空は相変わらずの曇り。気温は相変わらずの低さ。暖かい家の中から出てきた分、余計に寒く感じられた。

「あうう、寒いです」

小さな体をぶるりと震わせ、雪羽が言う。小動物のような仕草に和み、寒さが和らぐ気がする。

とりあえず、優奈行きつけの手芸店に行くことになった。

大手の手芸店だけに、品揃えは豊富だ。優奈の家の最寄り駅から電車で四駅。さらにそこから十分ほどの距離を歩けば、夕方からライトアップされるイルミネーションもある。誰かを案内するには丁度良いだろう。

「雪羽ちゃんは、ここに来たことある？」

問いかけると、雪羽は考えるそぶりを見せた。

「一応、来たことはあります。ですが、ええと、お買い物に来るのは初めてです」

電車で通り過ぎただけ、とかかな。優奈は曖昧に相づちを打った。

「ところで、優奈さんは何を買うですか？」

「うんとね、白いラウンドカットのビーズが足りなくて」

「ラウンドカット……」

呟き、雪羽はどこか物欲しげに優奈を見つめる。わかりやすい態度に、笑みが零れる。

「ラウンドカットっていうのは、そのまんま。丸い形をしたビーズを削って角を作ったビーズのことだよ」

ビーズの形には大雑把な名前がついている。

ラウンド・ドラック、これが角のない、丸いビーズ。他にオーバル、ライス、ラウンデル、ダブルコーンなど。

そもそも、一口にビーズと言えど、種類は様々だ。穴が空いて、そこに糸やテグスが通れば何でもビーズと呼ばれてしまう。形様々、材質様々、色様々、大きさ様々。ビーズワークをしようとすると、何かとお金がかかる。

手芸屋に行くととなると、財布の中のお金は帰るとき、少なくとも三桁になっているに違いない。

苦笑をしながら歩く。辺りはどこもかしこもクリスマス色だ。洋菓子店はともかく、携帯ショップや家電製品店まで、ジングル・ベルなどのクリスマスソングを流し、売り子もサンタクロースの格好をしている。

大手の書店の前では、クリスマス用絵本などの店頭販売が行われていた。

「――」

一つの絵本に、目がとまった。

「どうしたですか？」

無意識に足を止めていたらしい。一歩分先で、雪羽が首を傾げている。

「あ、ごめん。――懐かしい絵本があるな、って思ってた」

「懐かしい？ 何か、思い出の絵本なのですか？」

彼女の問いかけに、首を横に振った。

「特にないよ。小さい頃、読み聞かせてもらった絵本の一つ」

ただ、結構気に入ってはいた。

水彩で描いたような、輪郭のない、ぼんやりとした絵。明るいわけではない、どちらかというと地味な色。でも、その絵の雰囲気も好きだった。

「どのようなお話ですか？」

話の内容。どんなものだったか。店頭に置かれている一冊を手にとった。

『サンタさんとお手伝いさん』

そういえば、そんな題名だったか。

表紙は群青色。真ん中に二つの人影。白いシルエットで描かれるのは、サンタと――

「天使だ」

「ほへ？」

雪羽が近寄ってくる気配がしたので、彼女に絵本を見せてやる。

「天使が、サンタさんのことを手伝う話だよ」

「……天使が、ですか」

「そう」

少し驚いた様子の雪羽に見せるようにして、表紙をめくった。――ページ目には絵本の世界観の説明。下界の光に圧倒されて、星の消えてしまった空の絵だ。

「よくあるサンタさんの話と違って、舞台は現代。煙突の数は減って、夜は明るくなった。サンタさんは仕事をしづらくなっちゃったの」

ぱらり。

二枚目には、サンタと天使が登場する。

「サンタさんは人に姿を見られてしまうし、煙突がないんじゃない家に

は入れない。だから、天使が、手伝いを申し出たの。姿を消すことができるし、壁を通り抜けられるから」

ぱらり。

三枚目には子供部屋に入った天使の絵が描かれている。

「天使には一年間で人がやってきた『良いこと』がわかる能力があった。だから、子供がどんな良いところを持っているのかよくわかって、につこり笑いながら、プレゼントを置いていく」

ぱらり。

四枚目。天使が、サンタのソリに乗っている。

「子供たちと直接会えないサンタさんのために、天使は子供たちのことを色々教えてあげる。聞いている人まで幸せになれるような、そんな素敵なことを、沢山話してあげるの」

ぱらり。

五枚目では、プレゼントを配り終えたサンタと天使と一緒にクリスマスを祝っている。

「プレゼントを配り終えた二人は、来年のことも約束するの。一緒に配ろう、って。天使の話がサンタさんはとても気に入ったし、天使も素敵なことをサンタさんに伝えられるのが嬉しかったから」

ぱらり。

六枚目は、翌日の朝の風景。プレゼントを広げる子供たちの絵だ。

「靴下の中、ツリーの下、あるいは枕元にあるクリスマスプレゼントを見て、子供たちは喜ぶの。サンタさん、ありがとうって。でも、手伝いをした天使の存在には気がつかない」

ぱらり。

七枚目には、天界から下界を見下ろす天使の姿が。

「天使は少し寂しく思った。でも、自分は本当はプレゼントを届ける役割を持たない存在。だから仕方がないんだ。そう納得した」

ぱらり。

八枚目。一人の女の子がプレゼントと、もう片方の手に純白の羽根を持っている。

「でも、一人、天使の存在に気がついた女の子がいた。プレゼントと一緒に、白い羽根があったから。天使が間違えて落っことしてしまった羽根。女の子は天使が来てくれたことを知って、天使にも感謝する」

ぱらり。

九枚目には、澄み渡る青い空。それだけだ。

「おしまい、だね」

「……買ってきます」

え？ と声をあげる間もなく、既に雪羽はレジへと絵本を持って行ってしまっていた。

買って戻ってきた彼女にそんなに気に入ったのかと聞いたら、彼女は頬を染めて、恥じらう仕草を見せた。小さな声で、はい、と答える。

恥じらうのは中学生にもなって絵本を購入したからか。案外、絵本にも素敵なものはあるから、構わないと思うけれど。

袋に入った絵本を両手で大事そうに抱える雪羽と一緒に、本来の目的である手芸店へと向かった。

#### 4・ピースワーク

「あ、ここだよ、手芸屋さん」

九階建てのビル。自動ドアを入ると、暖かな空気が体を包んだ。

「うわぁ、キラキラ一杯、です！」

予想通り、というか、雪羽は目を輝かせて喜んだ。一階はピースでなく布を扱うフロアだ。しかし彼女はこのフロアを見て回りたくてウズウズしているようだ。

「ピースを扱ってるフロアは八階。私、先に行って必要なもの買っちゃうから、他の階とか、見てて良いよ」

そういうと、嬉しそうに返事をして、布に寄って行く。

中学生にしては、少し子供っぽい。それに、今までに一度も手芸店に来たことがなかったのだろうか。そうだとしたら、なかなかの箱入り娘だ。しかしその割に、人通りの少ない小道で遊んでいた。もしかして、近所に住んでいるのか。

エレベーターのボタンを押す。二つあるうち、左側のエレベーターが五階から下りて来た。チン、と音を立てて開いたそれに乗る。乗客は優奈以外、誰もいないらしい。

「あああ、待つて待つて待つて下さいです！」

閉のボタンを押そうとしたとき、ぱたぱたと雪羽が乗り込んで来

た。彼女が駆け込んだところで、丁度扉が閉まりだした。

「どうしたの？ 見なくて、いいの？」

「いいです！ 今日は優奈さんについて行くと決めたのです！  
…危うく、キラキラに惑わされてしまふところだったのです」

魅力的なものがたくさんあった上、それを見て回るお許しがでちやたからつい、そっちへ行ってしまったと。やっぱり、見た目以上に子供らしい。

無意識に彼女の頭をなでていた。

「ほあつ、何ですかっ？」

「ううん、何でもないよ」

ああ、可愛い。和んで、とても温かな気持ちになる。

「ああ、いや、良いことだよ」

「そうですか……？ なら、良かったです」

まあ、そもそも、頭を撫でるという行為で、そんなに悪い感情を抱いているわけもないが。しかし、雪羽は満足そうに、嬉しそうに頷いたから、いい。

たとえ下らない問答だったとしても、それを嬉しく感じてもらえるのなら全然いい。

先ほどと同じく、チンという音を立てて扉が開いた。

八階。ビーズ用フロア。

広々としたスペースに大量の棚が並び、そこに小さな袋に分けられたビーズがかけられている。あまりの種類の豊富さに、最初は圧倒されたものだ。

雪羽も優奈と大差ないようだ。呆然として辺りを見回している。しかし、優奈と彼女の違いは、その後の反応にあるだろう。

「キラキラが一杯ですっ！ 色々ありますっ！ 沢山ですっ！ 目移りがしてしまいますですっ！」

そう言って雪羽は棚に駆け寄り、色々なものに手を伸ばした。

優奈には半歩退いて、まずは初心者用キットのある棚を探した記憶があった。なんだか恐れ多い気がしたのだ。

はしゃぐ雪羽をそのままに、優奈は自分の求めるものがある棚を探した。探すことにも慣れて、求めるビーズの色と大きさ、形、素材など、必要な情報を元にすぐに探し出せるようになった。

袋をとり、手近にあった買い物かごにそれを入れる。ビーズようなので、買い物かごはスーパーなどにあるものの三分の一という小ささだ。

最低限必要だったものの後、他にも色々欲しいものをかごに入れていった。そういえば、テグスが少なくなっていたな。クリスマス用のキットは今買っておかないと、今後種類が少なくなってしまう

う。

かごが一杯になり、優奈がようやく落ち着いたとき、雪羽がビーズワークの教科書がおいてある棚を見ているのに気がついた。

「欲しいの？」

尋ねると、雪羽はこくりと頷く。

「ただ、本にも沢山の種類がありますですから、困っているです。どれがいいのかわからないです」

確かに、『初めてのビーズワーク』という題名のものだけでも二三冊ある。悩んでしまうのも尤もだろう。

「私はこれを初めて読んだなあ」

一冊とって、雪羽に渡してやる。完全な初心者のためのハウツー本。ビーズとは何か、という定義から始まって、簡単なレシピがいくつか載っている。

「でも、それは結構細かい知識まで書いてあるから、もし少しやってみよう、って思ってるだけなら、こっちの方がいいかも」

そう言ってもう一冊、雪羽に渡す。

こちらは工具の説明、レシピを読むために最低限必要な用語の説明が載っている。初心者用のアクセサリを一つ二つ作るくらいなら、こちらで事足りるのだ。値段もこちらの方が安い。

「ん……」

しばらく悩んだ末、彼女は最初に手渡された方に決めたらしい。もう一冊を棚に戻した。

「こつちにしますです。何かキットも買いたいのので、見繕ってもらえますですか？」

「もちろん」

手芸屋から出たとき、優奈の手には袋が一つ、雪羽の手には本屋で買った分を含めて三つ、袋がぶら下がっていた。

雪羽はハウツー本に、初心者向けキット、それに必要な工具一式をいっぺんに買ったのだ。キット内のビーズが傷つかないようにとの配慮のため、工具は袋が別にされている。

しかし、いっぺんにそれだけのものを買ったなんて、どれだけのお金を所持していたのだ。今から浪費癖をつけているのなら、将来が少々不安になる。

時刻は六時半。完全に夜の帳が下りている。しかし、繁華街であるこの街は逆に、夜になって明るくなった印象を受けた。

「雪羽ちゃん、時間大丈夫？ あんまり遅くなると親御さん、心配するよね？」

「大丈夫です。ええと、我が家は放任主義なのです」

たとえ放任主義でも、娘を夜中に外に出しておくのは、あまり良

くないと思うのだけれど。

「それより、私は優奈さんにビーズワークを教わりたいのです」

それより、か。なんだか、色々と不安な子だ。

「わかった、いいよ。でも、九時には私が帰らないといけないから、それまでね」

「はいっ！」

雪羽はにっこり笑って、頷いた。

## 5・約束

雪羽ちゃんにビーズワークを教えてく。九時までには帰る。夕飯は家ね。

素っ気ないメールを親に送ると、中学生をあんまり夜遅くまで引っ張り回すんじゃない、というお小言が優奈の元に届いた。

でも雪羽ちゃんの家ですぐそばだから、と適当な嘘でごまかして、それから一時間と三十分。喫茶店で他愛のない会話を交えつつ行ったビーズ教室が終了した。

工具の名前や目的、使い方。キットの中に入っているビーズの説明。レシピの読み方。基本的な技術を彼女に詰め込み、キットを少し進めたところで終えたのだ。

彼女が買ったのは、ピンクを基調とした、シュガービーズのブレスレットだ。レッド・ピンク・クリスタルの三色のシュガービーズをピンクゴールドのロールチェーンに取り付けるもの。ビーズにTピンを通し、それで輪を作り、つながるようにする。それを七つ終えるところまで進めた。

それだけといえはそれだけだが、細かい作業で、案外疲れるものだ。

雪羽は目を強く瞑り、そして体を伸ばしていた。

「ふあああ、疲れたです」

「まあ、慣れないと時間もかかっちゃうしね。でも、いずれもっと早くできるようになるよ」

携帯のデジタル時計を確認すると、八時。自宅に帰るまで、ここから四十分程度かかるので、まあ、この辺が頃合いだろう。

「じゃあ、雪羽ちゃん、そろそろ出ようか」

そういうと、彼女はぎゅっと眉間にしわを寄せた。

「……もつと優奈さんと一緒にいたいです」

「ごめん。でも時間が、ね」

雪羽は渋々といった様子でビーズを片付け、店を出る準備を始めた。

「あと一カ所、雪羽ちゃんを連れて行きたいところがあるんだ」

喫茶店から出たところで、そう言った。ふてくされた様子だった彼女の表情がぱっと明るくなる。

「どこですかっ?」

「近いよ。ほんの、二三分」

そう。もう、ここから二三分のところまで近づいている。そのためにわざわざ、手芸屋から、駅とは逆方向にある喫茶店を選んだのだ。

雪羽をつれて、信号を二つ越え、角を曲がった。街の中心部に  
ある公園があり、結構広い。

そこはクリスマスするときだけ趣を変える。一面光の世界だ。

赤、青、緑、黄、橙、様々な色に木々がライトアップされている。

中心の大木は頂点に黄金に輝く星を頂き、他の木と同じく、様々  
な色の光を葉に、幹に受けていた。

イルミネーション。

カップルや家族連れがわざわざ見に来る程度には有名だ。

「……っ」

公園を見て、優奈を振り返る。そしてまた公園を。何度も繰り返  
した後、雪羽は公園へ駆けだした。

「綺麗ですっ。素敵ですっ。輝いてますっ。キラキラですっ。凄  
いですっ。光の妖精さんが、沢山いるですっ！」

そう、この反応。素直に喜ぶ、楽しむ彼女が見たくて、連れてく  
ることにしたのだ。

夜は当然、昼間よりも気温が落ちる。しかしそれも感じさせない  
ほどに温かい気持ちにさせてくれる彼女が、少しでも喜んでくれ  
たらいい。そう思っ

「あ、あと、雪羽ちゃん」

彼女に追いつき、メモを取り出す。急いで住所と携帯のメールアドレス、電話番号を書いて渡した。

「何かあったら、いつでも連絡してね。ビーズのことの相談とか、いつでも受けるから」

雪羽はそれを受け取り、——優奈が思うのとは、違う反応を示した。

困ったように、そして悲しそうに眉尻を下げ、瞳を揺らしたのだ。

「嬉しいです。でも、私、連絡できないのです」

「……何で？」

「秘密、ですよ？」

そう言って、彼女は優奈にそっと耳打ちした。

「——」

ぽかんと間の抜けた表情をする優奈に、雪羽はにっこりと笑いかける。

「今日はありがとうございました。また、来年のクリスマス・イヴに、一緒に過ごしてくれますか？」

「あ、も、もちろんっ!」

楽しみにしてますです。手を振って、彼女は歩き出した。駅とは逆方向。親――保護者代わりの人と約束する場所には、駅を通過して行かないから。

「……また、ね」

眩くような優奈の言葉に、雪羽は振り返り、もう一度手を振った。

## 6・天使

自宅に帰って、夕食をとる。お風呂に入り、それからすぐ、優奈はビーズワークに取りかかった。作りかけていて、今日、足りなかった材料を買ったもの。一時間ほどで完成させると、それを小箱へ入れて、ラッピングした。

優奈の家ではクリスマスプレゼントをもみの木の下へ置く。鉢植えの中に入ったもみの木を、室内に入れるのだ。優奈はそこに、ラッピングした箱を置いた。箱の下に手紙を挟み込む。

満足して、優奈は自室へ戻った。窓から見える空は、相変わらず、雲に覆われているようだった。しかし、そこからチラチラと落ちてくるもの。

「雪？」

珍しくも、ギリギリ、ではあるが、ホワイト・クリスマスのように。例年、この日に雪が降ることはあまりないのに。

自然と笑みが零れるのを感じながら、優奈はベッドに横になった。

+

翌日、もみの木の下には親からのクリスマスプレゼントが置いてあった。その他に、小さな包みが一つと、手紙が一通。優奈が昨日用意したものはない。なっている。

待ちきれない、とばかりに、優奈は包みと手紙を手を取った。包みはふわふわとした薄葉紙を何枚か重ねたものを、リボンで結んだだけのシンプルなものだった。

開くと、そこにあるのは、ピンクを基調としたシュガービーズのブレスレットと、純白の羽根。

優奈は口元が綻ぶのを感じた。

+

『 雪羽ちゃんへ

作りかけてたビーズワーク、完成させたの。今日、クリスマスプレゼントは何もあげられなかったからね。……Angel Bear「White」。結構、力作のつもり。ストラップだから、どこかにつけてくれると嬉しいな。今日は楽しかったよ。ありがとう。

優奈 』

『 優奈さんへ

優奈さんからのプレゼント、大切にしますです。とても可愛らしい熊さんなのです。それに、白い天使……私とおそろいなのです。私からのプレゼントは、初めての私の作品なのです。頑張りましたですっ！ もう一つは……私の証、なのですよ。

雪羽 』

## 6 天使（後書き）

これで終わりです〜^ ^

読んで下さった方、ありがとうございました！

もしよろしければ、些細なことでも、アドバイスをいただける  
と嬉しいです。

では、今後もしよろしくお願いしますm（ ）（ ）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8515f/>

---

Angel Bear[White]

2010年10月28日01時42分発行